清野吉光氏のコラム 第46回

団塊耕志録

「絶対的真実…」

清野 吉光（きよの よしみつ）略歴

1950年　長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年　中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年㈱タクシーサイト創立、現取締役会長。2007年タクシーアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。

人は必ず死ぬ…

「世の中に絶対という事は無い。だから人と議論をするときに、安易に絶対という言葉を使わない方が良い」と忠告される。確かに自分の意見や経験からくる知見を確信するあまり、「絶対こうだ！」と我々は思いがちだ。人の意見に耳を傾け、「その人にとっての真実」を受け止め、自分の知見を広め、深めるために必要な姿勢だとは思う。しかし世の中には逆に「絶対的な真実」でありながら、それを意識し、認めたがらない事がらもある。それは、人は（まさに当の自分自身も含めて）必ず死ぬという真実だ。もちろんこの事自体を否定する人はまずいない。しかし、この真実を踏まえながら日々生きると言う事は、なかなか難しい。もちろん、だからこそ、人間は日々平穏に生きていけるのかも知れないし、その真実を意識しないよう脳の構造ができていて、それはもしかして天の配剤なのかも知れない。

しかし、逆に「良く生きる」ためにもこの「絶対的な真実」を意識化し、現実的に捉えることも必要だと、最近強く感ずるようになってきている。それは、もちろん齢62を超え、生物学的にもあちこちと衰えが出てきているという事が要因かもしれないが、「人は本当に死んでしまうんだ…」と言う事を強く実感させられた事がある。

7月29日のオリジンの佐藤会長の逝去である。もちろん身近な人の死は父、義父、義母、友人など多くを経験しているが、「自分の死」に結び付けて「身近な人の死」を感じたことはなかった。年齢の所為なのか、立場の所為なのか、あるいは亡くなる過程における交流の濃密さによるものなのか…。そして「自分も確実に死ぬんだ…」という実感と、だからこそこれからの人生をどう生きたい（死にたい）という事を真剣に考え、死に備え、準備しなければならないという思いを強く感じた。「死への備え」などと言うと後ろ向きで、残された人への配慮（それも必要だが）という面だけで受取られがちだが、残された余命（これは、どれだけあるか誰も判らない）を自分がどう納得した形で送る（生きる）か、という事と同義語である。そして自分が生物学的に消滅しても、近隣の人の心の中でどれだけ深く生き長らえるかという事と、不可分である。葬儀の時に自分はどんな弔辞を述べて貰えるだろうか？世間では、結婚式と葬式の時にはほめて貰えるのが普通だというから、悪口は聞かずにすむかも知れないが、皆の本当の心の中にどのようなものとして残るのだろうか？たまたま佐藤会長の葬儀で、オリジンとの合同葬を行わせて頂いた当事者として、弔辞を述べる機会があった。この弔辞を聞いて、佐藤会長がどのように思ってくれているかは確かめるべくも無い。8月3日の葬儀の日に、私が会長にどんな思いを伝えたか、ここに紹介したい。

弔辞

7月14日土曜日、ほんの3週間前、私は佐藤会長の病室で、オリジンの現状や、行く末について、会長のアドバイスを頂いていました。

その時は「8月になれば、退院し、通院できるようになるかも知れない、まだまだ暫くは頑張れるよ！」とハッキリした口調で仰っていました。まだやりたい事、やり残したことがあって、それを実現するために、回復への強い意欲を持ち、懸命の努力を、病床にあっても続けられていました。

しかし、残念ながら、会長の率直なコメントやアドバイスも、もう聞く事はできません。「今のオリジンはどうかね？」という質問や、報告をもう求められる事もできません。会長はオリジンの現状と将来に、深い関心と期待を示されることはあっても、こうしろ、ああしろという指示、命令の言葉は一切なく、一方、オリジンが苦境にあれば、親身になって様々な支援をして下さいました。オリジンの後ろ盾である会長を失った事は、私にとっても、そしてオリジンにとっても大きな痛手です。平成5年の会長就任以来19年、経済面でも精神面でも、オリジンを大きく支えてくれ、また一方で、現場の経営陣を信頼し、任せて下さった佐藤会長に心から感謝をしています。

お陰で、システムオリジンも本年創立30周年を迎える事ができ、タクシー業界に、お役立ちをするソフトハウスとして、一定の存在感を持つ会社になる事ができました。6月の半ば、入院前の会長の自宅のベッドの横で、会長から2時間に渡るタクシー業についての講義を受けた事が、今強く印象に残っています。病状が厳しい中『資本主義が嫌いな人のための経済学』という大部の本を読破され、その中でオリジンの経営に役立つだろうと、タクシー業界に言及している部分を音読して下さり、タクシー業界とオリジンの行く末について、真剣に考えて下さっていました。

また、やはり佐藤会長が会長を務められる経営アイティーコーチャーの玉井社長をオリジンの経営改革支援の為に、急遽、派遣して下さいました。会長の志を継ぎ、会長の期待にこたえるために、システムオリジンの経営陣、そして社員一同、お客様に真に役立つ会社への、改革と成長を成し遂げて行きたいと思います。会長、本当に有難う御座いました。是非とも我々を天上からお見守り下さい。そして夢枕でも結構ですから、「オリジンの調子はどうかね？」と問うて下さり、そしてオリジンへの率直なアドバイスを続けて下さい。会長との出会いに感謝し、心からの御冥福をお祈りいたします。本当にありがとうございました。

平成24年8月3日

株式会社システムオリジン

代表取締役社長　清野吉光

以前の第30回のコラム「温かい死」で、多くの患者を看取った熊本の大手病院の医師が、死には「温かい死」と「冷たい死」があるように思うと語った事を書いた。死にはいろんな死があるが、しかし基本的にはその人の生きてきた「生」の結果である。だからどのような死を迎えるかはどのような生を生きるかという事であり、死に方を意識した生をいきねば、土壇場で後悔する事になる。こうしたテーマはまさに宗教のテーマであり、宗教とは比較的縁のなかった我々団塊の世代は、まさにこれからこの宗教的テーマに世代的に直面し、答えを問われるようになる。そしてこのテーマに正面から対峙し、見事な生き方＝見事な死に方を示すことができれば、我々団塊の世代が若き時代に問うた問いへの自らの答えにもなるのでは…と思う。

ちょっと感傷に走った結論になってしまった。言うは易く、行うは難し、会長の死に際し、ふと心に巡ったものを書きなぐりました。

（2012年9月23日記）